小谷城跡

浅井氏と小谷城

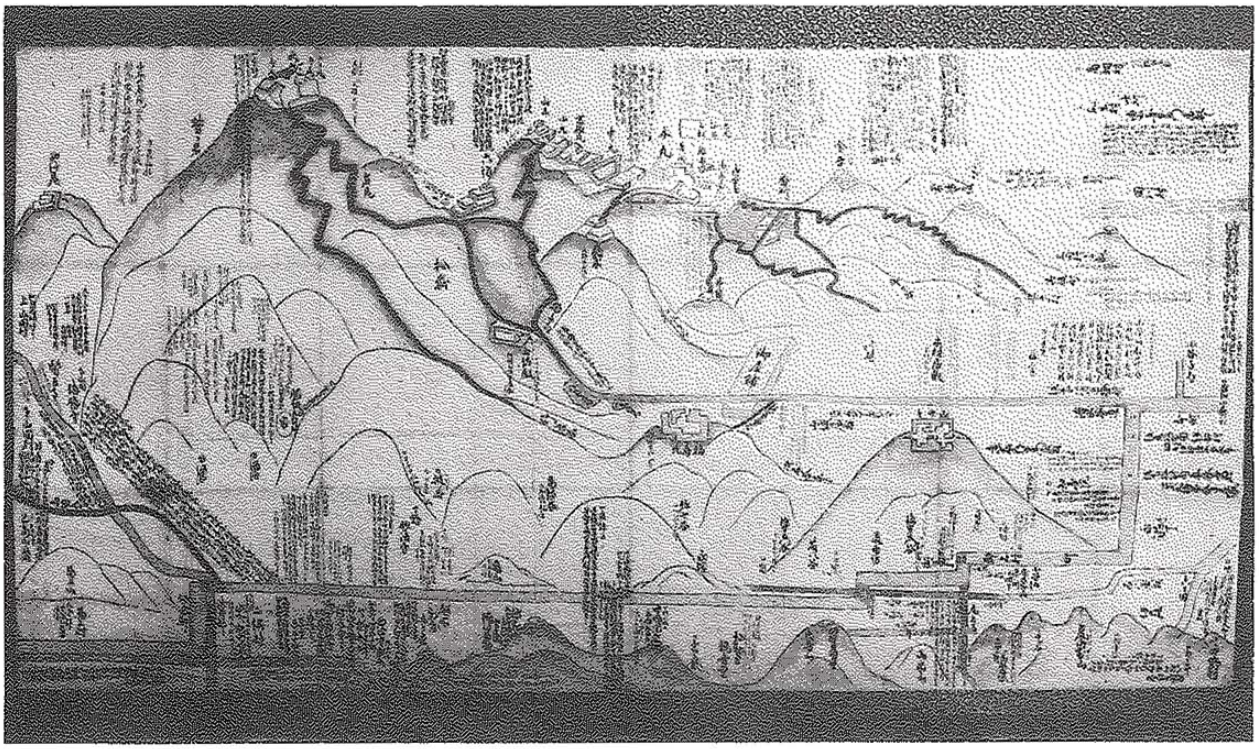
東浅井郡湖北町と浅井町にまたがる小谷山（海抜 395メートル）は、近江北部（以下江北という。）3郡を一望することができ、しかも北陸路と中山道を扼する要衝の地に位置しています。ここにある小谷城跡は、中世の典型的な山城として国指定の史跡になっています。

城主浅井氏は、もと江北の守護京極氏の被官（家臣のこと）でした。大永3年（1523）京極高清のとき、京極家に跡目争いがおこりました。このとき次男高慶を立てようとする執権の上坂信光派に対抗し、長男高延を擁して浅井亮政が三田村・堀・今井・浅見の諸氏を糾合して台頭したのです。

明くる大永4年（1524）、亮政は急據小谷山上に築城し、京極氏を迎えて自ら執権となり、遂には京極氏に替って江北に覇を唱えることになります。

小谷城はこのときに始まります。現在は遺構が全山にわたっていますが、その当時は尾根の主要部だけであったものと思われます。金吾丸は大永5年（1525）、六角氏との合戦のとき、応援にきた朝倉金吾教景の陣所であり、六坊は天文22年（1553）2代久政の手になり、大嶽は元亀元年（1570）3代長政のとき築いたものです。

初代亮政・2代久政の時代は、京極氏や六角氏との戦いにあけくれ、その多くは坂田郡が戦場となりましたが、3代長政の時代になると行動範囲がぐっと広くなります。まず、永禄3年（1560）16歳のとき野良田合戦にお



▲小谷城跡古絵図（小谷城址保勝会蔵）

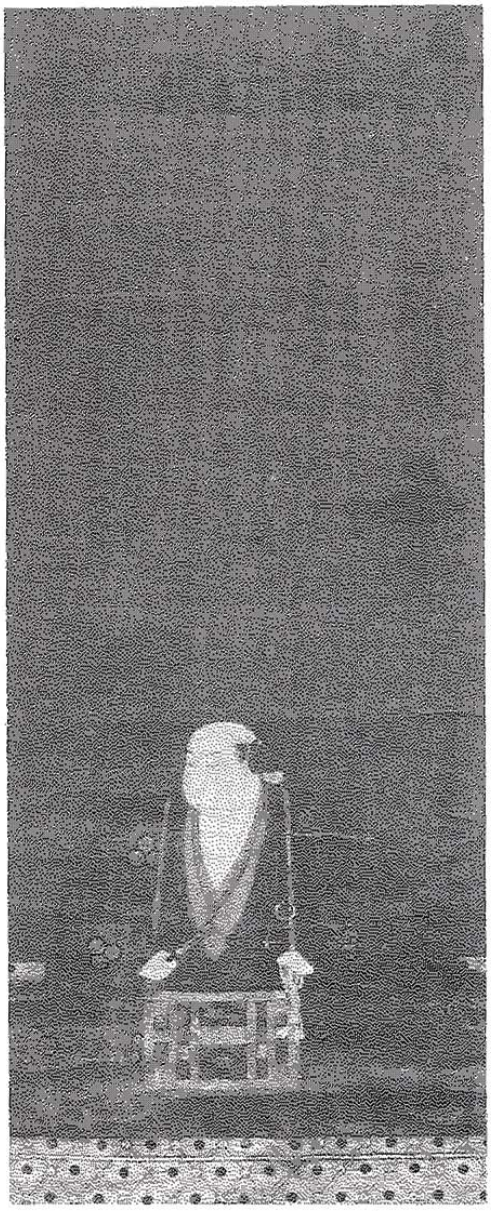
51. 11. 31

財団法人　滋賀県文化財保護協会

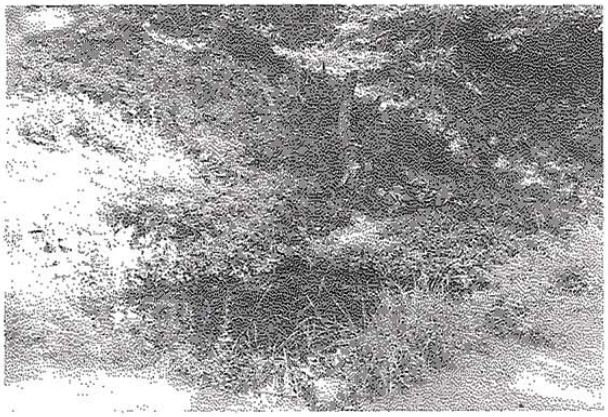
いて、２倍半に及ぶ江南六角義賢の大軍に圧勝して勇名をあげ、更に永禄４年（1561）東は岐阜の美影寺川の合戦に斉藤氏を破っています。また、この年、織田信長の妹お市の方と結婚後は、京都にまで駒を進め、二条城修築にも協力しています。

このように愛知川より北６郡を領有して順調に勢力を伸ばした長政でしたが、元亀元年（1570）盟友朝倉義景が信長に攻められたとき、織田軍を江越国境に夾撃して敗りました。これによって信長との間の和は破れました。

この年６月28日、浅井・朝倉連合軍と織田



▲絹本著色浅井長政像（小谷城址保勝会蔵）



▲馬洗池

・徳川連合軍との生死をかけた姉川の合戦は、長政に利あらず、小谷城への敗走となりました。

小谷城の堅固さはさしもの織田方にとっても一挙に抜くことができず、その後３年かかっています。この間、長政は朝倉氏はもとより一向一揆・比叡山徒・武田信玄・六角・三好氏らと緊密な連絡をとりながら激しく抵抗します。しかし、信長は浅井氏の武将を誘降し、支城を陥れ、城下町や湖岸の港、街道筋を始め稲田まで焼払い、遂に天正元年（1573）８月28日、城主長政の自刃とともに小谷城は落城しました。

長男万福丸は捕えられて斬られましたが、お市の方と３人の娘は信長のもとへ送られました。この娘たちは後に成人して、長女茶々は豊臣秀吉の側室淀君として秀頼を生み、二女初子は京極高次の室となり、三女達子は徳川秀忠夫人として千姫・家光・忠長・東福門院（後水尾天皇中宮）等を生み、何れも後世に名を残します。

小谷城攻略の武功第一として信長に認められた秀吉は、浅井氏の遺領のうち12万石を領し、９月中旬には早くも小谷城主として入城します。その後、約２年半をここに在城し、天正４年（1576）春、今浜を長浜と改め小谷の石塁・城楼・町屋・寺院などを長浜に移したので、小谷城は終わりを告げます。その後400年間、利用する者もなく、昔のまま今日

を迎えたことは、城郭研究上きわめて重要なことです。

小谷城跡の環境整備事業

昭和45年より６年間にわたって、主要部分だけではあるが環境整備事業が行われ、数々の新しい事実を確認することができました。

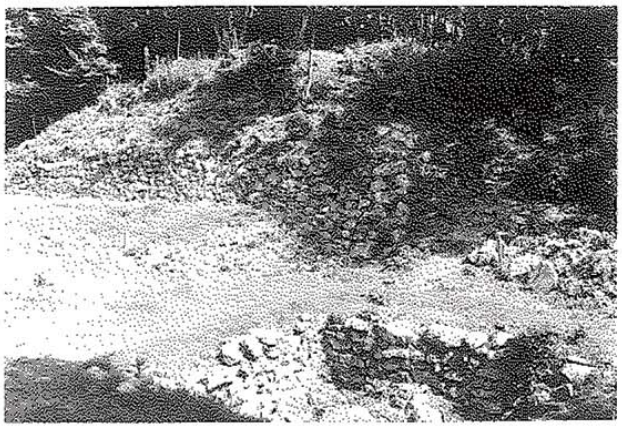
(1) 発掘調査での第１の発見は、郭跡の礎石群です。桜馬場下段・大広間跡・本丸跡・本丸下帯郭等に、直径約40センチメートル前後の川原石が、 191センチメートル（６尺３寸）間隔に整然とならんでいました。

(2) 馬洗池・刀洗池のほかに山腹に水の手がありますが、今度新たに大広間跡本丸寄りに縦3.3メートル横 2.7メートル深さ 0.9メートルの石積みで囲った井戸が発見されました。その底はたたき土で固められていました。

(3) 大広間跡に広さ６メートルに３メートルのほぼ長方形の敷石の跡が発見されましたが、多分倉庫跡と思われます。

(4) 出土品としては、宋銭・明銭を含む中国の古銭、室町後期の作と思われるかわらけ、銅製の円鏡、鉄製の火うちがね、大太刀用と思われる切羽、石うすの残欠・硯、無数のつぼの破片等があります。

なお、今回の調査で興味をひくことが、二つあります。その一つは瓦の破片が出てこなかったことです。おそらく屋根は瓦葺ではなく、植物性のもので葺かれていたのでしょう。大広間などは屋根の裏板の上に杉皮をならべ、それを重石でおさえていたと考えられます。事実そのおもしに使われたような石が沢山散在していました。

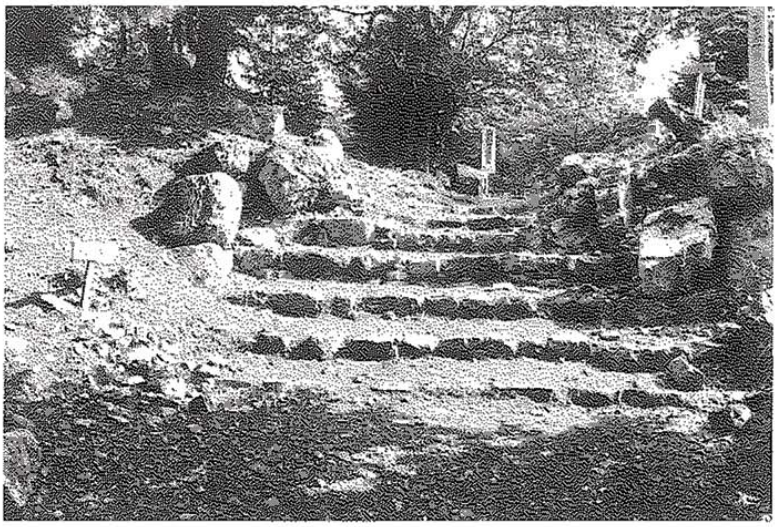


▲大広間跡より本丸を望む
（手前は新たに発掘された井戸）

もう一つ興味をひいたのは、建物などの焼失した痕跡が全く見あたらなかったことです。焼け石もなく、炭化した物も発見されなかったことは、落城の際も炎上しなかったことを物語ります。このことは、後の城主秀吉によって、城が長浜へ移築されたという記録を裏付けるものと言えます。

小谷城跡の保存

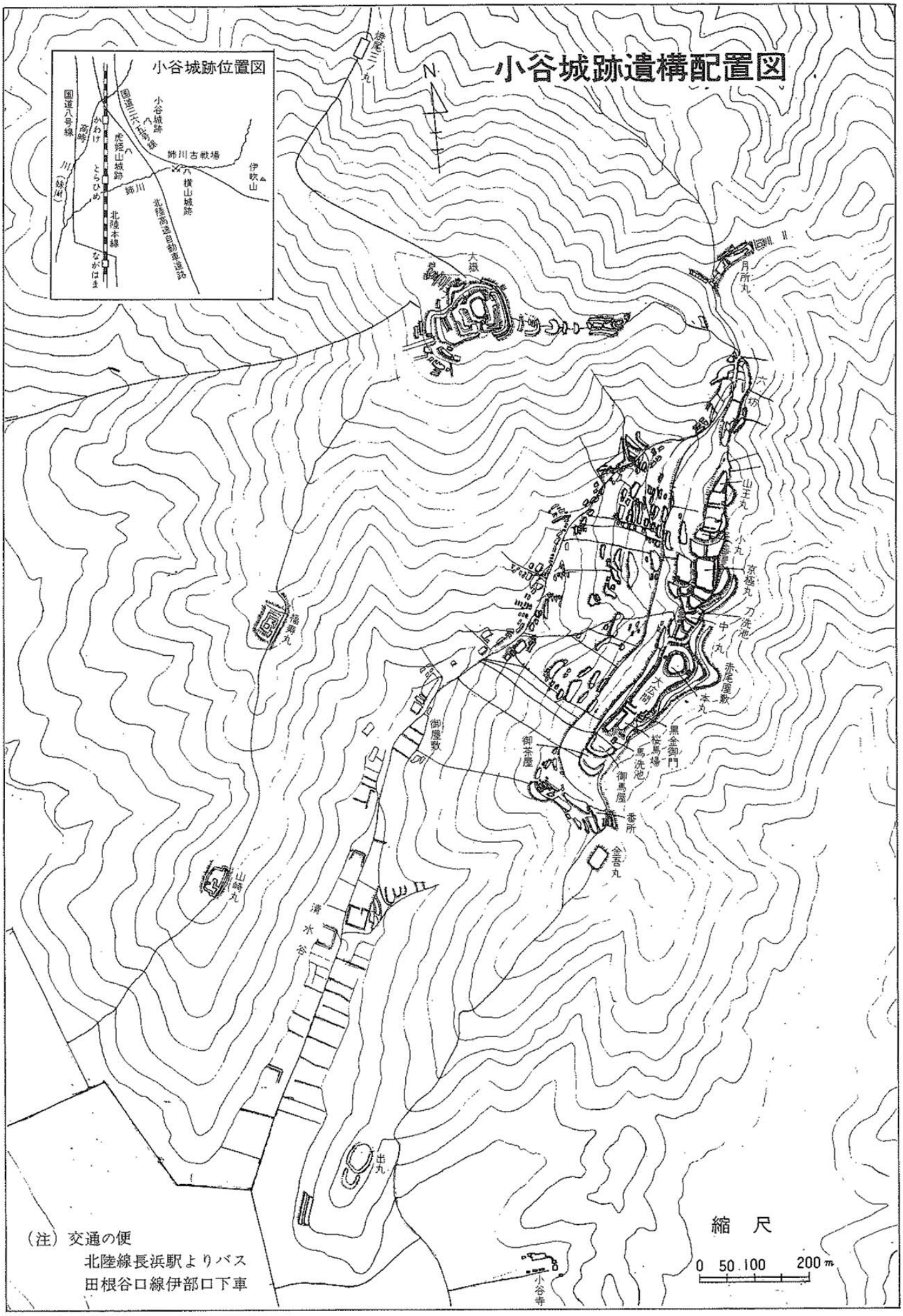
地元住民によって結成している「小谷城址保勝会」のその後の調査によって、尾根の主要郭以外に、山腹や大嶽周辺・月所その他に石積み・土塁・竪堀・削平地など数々の遺構のあることが判明しました。更に清水谷には中世山城の特徴である根小屋跡が残っていますが、最近その近くまで開発の手が及んできています。これらの貴重な遺産を破壊から守るには、まず史跡指定区域の拡大を図ることが大切で、関係方面ではその対策を急いでいます。



▲黒金御門跡

（中村一郎氏提供）

小谷城跡遺構配置図



（注）交通の便
北陸線長浜駅よりバス
田根谷口線伊部口下車